

日本史A課題プリント 2

東アジアとの交流 古代

教科書 p 14 - 15

[仏教で結びつくアジア]

古代東アジアの人々の交流を示すものが(①)である。仏教は、中国から朝鮮半島の(②)をへて、日本にもたらされた。(③)世紀の半ばである。続く飛鳥時代に活躍した聖徳太子は、(④)の僧から仏教を学んだ。奈良時代になると、唐の僧(⑤)が来日して日本仏教の基礎をきずいた。いっぽう、日本の僧たちも遣隋使や遣唐使、遣新羅使とともに中国や朝鮮半島にわたった。大化改新後の政治改革に関わった(⑥)や、大仏造立を命じた(⑦)の仏教政策に関わった玄昉などが有名である。また、平安時代初期に唐から帰国し(⑧)と真言宗を伝えた最澄と(⑨)は、日本の仏教に大きな影響を与えた。最澄が建立した(⑩)は平安時代の仏教の中心となり、鎌倉時代に誕生する新仏教の開祖の多くはここで学んでいる。

[東アジア世界秩序の形成と日本]

唐との交流を通じて、周辺諸国は唐と同じような制度や文化を持つようになった。大和政権は、新羅や渤海に対してさかんに(⑪)を求めたが、これは中国王朝が持っていた(⑫)をとりいれたからである。朝貢の要求は、奈良時代から平安時代にかけて対立や抗争の要因ともなったが、民間交易は活発に行われた。(⑬)の香料や薬、染料、渤海から持ち込まれた毛皮や薬用人参などが珍重された。また(⑭)をもてなすために、能登客院などが設けられた。(⑮)は遣唐使船の発着地であり、新羅や渤海の商人たちが立ち寄る港として繁栄した。博多には唐房とよばれる(⑯)があったこともわかっており、遣唐使が廃止され中国が唐から宋に代わった後も活発な交流が行われていた。

日本史A課題プリント 2

東アジアとの交流 中世

教科書 p 16 - 17

[宋銭と三斎市の出現]

12世紀後半、平清盛が(①)を修理して宋との貿易を活発にした。そのさい、(②)は主要な輸入品のひとつであった。鎌倉時代には、(③)などの肥料が利用され、(④)もはじまって農業の生産力が向上した。手工業も発達して、十日に一度ひらかれる(⑤)が各地に出現した。そこで盛んに宋銭が用いられた。モンゴル帝国を建国したチンギス＝ハンの孫、(⑥)は、都をカラコルムから(⑦)に移して、国号を元とした。元は(⑧)を服属させ、南宋を滅ぼした。日本へは2度にわたって遠征軍を送った。これを(⑨)という。しかし両国の商人は自由に往来し、銅銭の輸入は続けられた。

[大唐米と三毛作の実現]

室町時代になると(⑩)と呼ばれた品種の米がさかんに食べられるようになった。この米は古くから日本で栽培されていた(⑪)ではなく、ヴェトナム南部で栽培されていた(⑫)である。大唐米は、やせた土地でも栽培でき、早熟であったため、やがて二毛作から(⑬)へと農業の集約化が進んだ。(⑭)や瀬戸内海地域の武士や商人らが、14～16世紀に東シナ海を渡って貿易に従事したが、取引が不調になると海賊行為を行い、(⑮)とよばれた。その倭寇には中国・朝鮮の人々も加わり活動していたが、大唐米も彼らによって日本にもたらされたと考えられる。